

言葉に対する感覚

小堀(杏): 有名な数学者の広中平祐さんがテレビでおっしゃっていたのですが、たいへん感激したことがございます。以前私は、数学というのはおよそ芸術とは反対で、天才の閃きみたいなものは不必要だし、ただ理詰のもののように感じていました。それでいつか緒方富雄先生が天才的なものがない数学者ほど面白くないものはないとおっしゃったのを伺って、非常に私は教えられるところがありました。広中さんも、数学者にとっていちばん大切なのは感覚だとおっしゃるのです。たとえば、大学の入学試験の数学は、どんな数学者でもすぐには解けないような難しい問題がたくさんありますけれども、それでも考えれば最後には解ける、しかし大学を出て一人前の数学者になってから何がいちばん大切かという、それは感覚だとおっしゃるわけです。

私もまったく同感でして、人間にとっていちばん大切なのは感覚だと思います。たとえば当用漢字・新仮名づかいは、視覚と聴覚とを完全に無視した制度だと私は思うのですけれども、一

つの例として「薔薇」と「バラ」の違いを見てもおわかりになるでしょう。「薔薇」は、花びらが複雑にたたまって、いい匂いがばあっとしてくるようになります。ところが「バラ」ですと、どうしてもバラバラ事件を連想してしまいます。感覚というのは、もっと高められるべきものではないかと思うのです。ですから、一番感覚が鋭敏な幼児のときが大事なのですね。中勘助さんは、三つのときにおばさんに百人一首を毎日毎日教えられて、それをいつの間にかそらんじてしまうというのがありましたね。「立わかれ いなばの山の 峯におふる まつときかば 今かへりこむ」と教えられるわけですが、そのときやはり旧仮名でなくてはいけないのです。「お^うる」や「か^えり^こん」では駄目なのです。感覚が鋭くないのです。私の孫なんかを見ていますと、そういう美的感覚を育むことがまったく無視されていて、その点で明治に生れて非常に幸福だったと思います。世の中のありとあらゆるもの、政治でも経済でも、最後は感覚に決定権があるのだということを、この頃つくづく思います。

石井: 岡潔先生も同じようなことをおっしゃっていましたね。